

空間と時間の

観念を考える

先日、「万葉文化をよむ」の準備の関係で、休日に吉野の宮滝を訪れた。

私の今までの関心は、宮の位置や周辺地形を探ることしかなく、歴史系出身である私にとって、宮滝は遺跡の場ではなかった。七年ほど前に訪れた時も、壬申の乱の大海人皇子の足跡を辿ったに過ぎない。

ところが、昨年の十月に万葉古代学研究所に入所して以来、地名ばかり見つめていた『万葉集』への見方が変化した。歌の内容(感性)にも注目する自分がいたのである。

たとえば、『万葉集』巻二―三―一六

番歌に、次のような歌がある。

昔見し 象さかの小河を 今見れば

いよよ清さやけく なりにけるかも

これは讃歌なので、ある程度は差し引かなければならないが、大伴旅人作のこの歌に、私は共感せずにはいられなかった。以前は何とも思わなかった「象の小河」に対して、先日訪れた時にはまるで違う印象を抱いたからである。深さがわからないくらい水が澄ん



喜左谷川(象の小河と推定される川)

でいて、吸い込まれるような感覚に襲われ、なんと美しい川かと驚嘆した。こうした時間による感覚の変化は、「昔見し：今見れば：」の時間観念に通ずるところがあるように思える。

変わらない同じ空間であっても、そこに時間の観念(以前と今)が加わることで、新たな刺激が与えられ、持っていたイメージを変化させる。そうした感覚は、誰もが一度は経験したことがあるだろう。

この歌が作られた当時、大伴旅人は久しぶりに「象の小河」を見て、以前よりいっそう思いを増したようだが、私は以前の記憶を覆すほどの印象をおぼえた。このたび体験した時間による感覚の変化を、どうにか歴史学に生かせないものかと考えさせられる歌である。

(万葉古代学研究所主任研究員、竹本晃)